

スマホが医療カルテに 患者と医師をつなぐ ウェブサービス

現役の医師と情報工学分野の専門家が立ち上げたメディカルデータカード社は、今年7月にSUCCESSの出資が決まったばかりだ。患者自身が医療情報をウェブ上で管理し、いつでもどこでも閲覧できるサービスを提供して、患者と医療機関との懸け橋となることをめざす。同社の洪繁取締役会長と西村邦裕代表取締役社長に、事業の本格化に向けた意気込みを聞いた。

にしむら くにひろ
西村 邦裕

メディカルデータカード社
代表取締役社長

2006年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士(工学)。同大学院情報理工学系研究科助教を経て、11年にテンクー社を創業し、代表取締役社長に就任。



こうしげる
洪 繁

メディカルデータカード社
取締役会長
慶應義塾大学 医学部 准教授

1999年 名古屋大学大学院医学系研究科修了。医学博士。同大学医学部附属病院学内講師や慶應義塾大学医学部専任講師などを経て、2016年より同准教授。

のは、2013年に慶應義塾大学が採択されたJSTの「センター・オブ・イノベーション(COI)プログラム」における「健康長寿の世界標準を創出するシステム医学・医療拠点」がきっかけだった。

「医療情報は究極の個人情報なので、医療機関ごとに管理されています。COIには医療機関同士で電子カルテを共有するシステムを構築する研究があります。急病や引っ越しで転院しても、医療情報が引き継がれ、効率的で患者に寄り添った医療ができるからです。その中で、患者本人が情報を持ち運べばいいのではないかと、という、いわば逆転の発想が生まれ、2014年10月にメディカルデータカード社を設立しました」と代表取締役社長の西村邦裕さんは設立の経緯を説明する。

臨床医および研究者として約25年間にわたり活躍してきた洪さんと、情報工学の専門家として10年以上もシステム開発に携わってきた西村さんがタッグを組むことが、同社の最大の強みだという。いかに診療現場に合った使いやすいシステムとするかを洪さんが医師の視点で知恵を絞り、それを実現する技術を西村さんが作り込む。「一から十まで、2人の知識や経験が詰まっています。どちらが欠けても実現できません」と洪さん。

医療リテラシーの向上と健康長寿社会の実現に貢献

多くの医療機関にMeDaCa PROを導入してもらい、事業を軌道に乗せたい。民間のベンチャーキャピタルとも協議したが、JSTの単独出資を希望した。

「医療情報を安心して預けていただくためには、信用が大事です。公的機関であるJSTの出資を受けることで信用が高まり、会社の成長につながると考えました」と西村さん。

患者と医療機関の懸け橋になるとともに、医療リテラシー(医療に関する知識や活用する能力)の向上に貢献することにもめざしている。

「誰もがいつでも自分の医療情報を知るようにになれば、医師の話を理解したり、健康情報を日常生活に活用したりするなど、『医療リテラシー』の向上が期待できます。知ることは自分自身の安心につながるだけではなく、ひいては社会も良くなるのです。医療現場では、過去の診察や検査記録さえあれば失われずに済む命もあります。1つでも多くの命を救うためにも、いつでもどこでも最適な医療を受けられる仕組みを作りたいのです」。洪さんと西村さんは力強く語った。

自分の健康・医療情報をウェブ上で管理

「生まれてから死ぬまでの間には、誰もが必ず病院にかかります。健康寿命を延ばし、人生をより豊かにしていくには、自分の健康や医療の情報を自身で把握し管理することが必要です。それを実現し得るのが、『MeDaCa(メダカ)』アプリです」。そう語るメディカルデータカード社取締役会長の洪繁さんは、慶應義塾大学医学部准教授として、研究者と臨床医の顔を持つ。メディカルデータカード社は、個人の医療情報をまとめて管理するための情報

通信技術の開発と運用を行うベンチャー企業だ。患者向けのスマートフォンアプリ「MeDaCa」と、医療機関向けのウェブサービス「MeDaCa PRO」を提供する。

MeDaCaは、今年2月に開始したサービスで、誰でも無料でアプリをダウンロードできる。血液検査の数値やレントゲンの画像データ、処方せん、健康診断書などの医療情報がスマートフォンのカメラで撮影するだけで保存され、日付やカテゴリー別に表示される。パソコンやタブレットでも利用できる。

自分の医療情報をどこへでも持ち運び、いつでも閲覧できることの利点は多い。医

療情報の継続した記録は、健康や病気への関心を高める情報源になる。

引っ越し先で初めてかかる医療機関でも、アプリに保存している過去の検査データを示し、医師に的確に伝えられる。「初めてのお医者さんを、初めからかかりつけ医にできる」と洪さん。

旅先で急病になった場合でも、自分の体質や健康状態に合った治療を安心して受けられる。単なる記録ではなく、自身の医療情報を「知る」、的確に医師に「伝える」、急病などに「備える」ための有効な手段なのだ。

患者と医師をリアルタイムにつなぐ

患者と医療機関とを結び付け、医療機関同士の連携も可能にするサービスが、MeDaCa PROだ。医療機関がMeDaCa PROから検査データの写真やPDFを患者のMeDaCaにアップロードすると、患者のスマートフォンに通知され、患者はリアルタイムに検査データを見ることができる。

現時点では、紙や電子媒体で受け取った検査の数値や画像などの医療情報を患者自身の手で保存する仕組みだ。将来は患者の希望に基づき医療機関から自動的に保存されるなど、患者と医療機関の双方の利便性を向上させていく。

患者の許可があれば、医療機関同士が情報を共有できることも特長である。他の医療機関での過去の病歴や検査データを

確認することで、不必要な検査の排除や診察時間の短縮など診療業務を効率化し、最適な医療行為につながる。

データをやり取りする都度、必ず患者の同意を得る仕組みである。データセンターは国内にあり、サーバーとは暗号化通信するなど、患者の医療情報は高度なセキュリティで管理されている。

医学と情報工学の知識と経験が結実

ベンチャー企業設立の構想が生まれた



患者は自分の医療情報を管理でき、いつでもどこでも最適な医療が受けられる。医療機関はすぐに患者の病歴や検査記録を把握でき、不要な検査をせずに適切な医療行為を提供できる。



図2 左: MeDaCaアプリのトップ画面。「予定表」、「診察券」、「わたしの記録」、「処方せん」、「領収書」、「医療機関検索」に分類されている。中: 検査記録の画面。各検査の詳細も表示できる。右: レントゲン記録の詳細画面。CTやMRIなどで撮影された画像も見ることができる。



MeDaCaアプリはアプリストアで「MeDaCa」で検索するか、上のQRコードを読み取ることでダウンロードできる。
<https://medaca.co/>